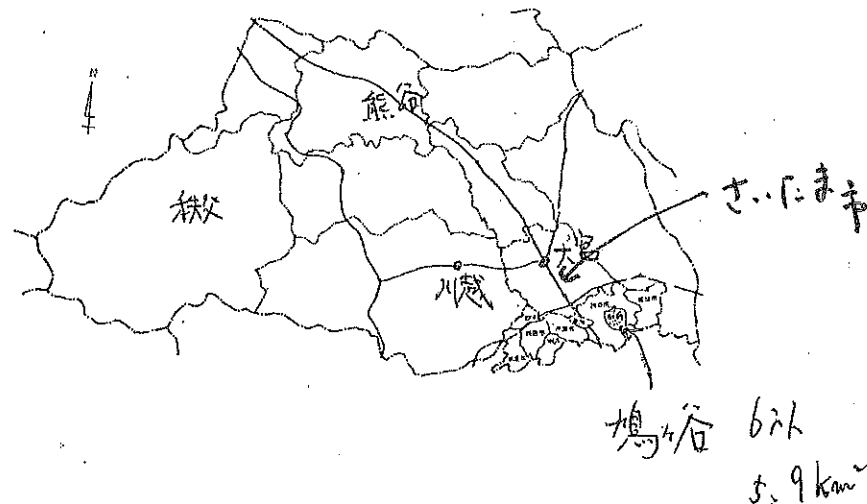


「地域でともに生きる」

地図



はじめに

退職後、ほぼ10年たって、障がい者と共に、地域でどう生きているかを報告したい。

その際以下の論点に留意したい。

1、地域の学校が、やはり大きな役割を果たしており、私がかつこの関わりを継続していることで様々な便宜をえている。元教員や現職の教員の果たす役割は大きい。

2、地域で生きる場合、その文化的な側面に着目してきた。始まりは学校生活の中で作ってきたものだったが、それを卒業後も続けたいと考え、今日報告することを始め、継続してきた。それを総括すると、文化的な活動だと言えた。一般的に人々がつながるその中身として、文化的なものの意味を、どう考えるか。改めて考えたい。実際、そのつながりによって、地域で豊かに生きる、その内実を作っている。

だから、スポーツをしたい。一緒に調理をしたい。会食したい。話したい。遊びたいなどの要求を実現していくことは、道理に合うことだったと考えているが、その実現の条件をさぐり、継続していく道を築く必要がある。私も後期高齢者になっている。

3、一方、労働の場、そして収入を得る方途はどうなっているか。学校教育が進路指導として、生徒を送り出してきたが、指導理念や、それを支えた制度、企業の状況などの検証という課題があるはずだが、今の状況では、その検証をすすめる任に堪えられない。課題である。

第1部 何に取り組んできたか。

1、HDSの活動

月に1から2回、日曜日市内の学校開放をしている小学校にて卓球をやっている。

2、同窓会

年に1回、出身中学校の特別支援学級の教室や家庭科調理実習教室をお借りして開催している。

3、個々の活動

ボーリングで、障がい者の全国大会に参加するものが誕生。

.....ボーリング大会を開催する。

浦和レッズの試合に誘い、共に観戦する。

プロバスケットボールの試合に誘い、ともに観戦する。

私の演劇公演に複数で観劇する。

子どもを守る市民会議主催の子ども祭りのスタッフとして参加する。

私の「学校支援員」の活動。

第2部 そのささやかな活動の条件

1、学校教育で追及してきたこと

社会科を中心に構想し、展開した教育実践 別紙

2、退職後の活動 生活の中に演劇がある。

この1年に限れば

2017年8月 演劇公演「魔法使いの弟子」演劇サークル「夢さしの」 出演

10月 演劇公演「ミロンガ」劇団匂組 出演

12月 演劇公演「父と暮せば」劇団キンダースペース 出演

2018年4月 演劇公演「how many いい女」同上劇団シニアワークショップ 出演

6月 演劇公演「紙屋悦子の青春」劇団キンダースペース 出演

7月 リーディング公演「父と暮せば」 出演 2回

3、上記「1から2へ」という論理の発見。 滝澤民夫さんにより、展開された。(埼玉県歴教協『くわ』256)

第3部 課題 自分の形成とみんなの形成。どこに向かうのか。

出会いは、学校。

そのつながりの中身は学校の中でつくられた。

学校を卒業しても続けたいという要求をもった。

そして、

だから、

社会性と社会認識についてのメモ

社会性の定義・・・

A 「個人が存在する社会のなかにあるルールやふるまい方を身につけ」「自分らしく生きていくこと」。「社会化」と「自己形成」(一松麻実子著『人と関わる力を伸ばす』)

B 「社会の中でうまくやっていく術にたけていること」「社会に適応する術」=社会性。それに対し「社会を作り変革していく力」=社会力。(門脇厚司著『子どもの社会力』)

社会力・・・よかれと思う社会を構想し、それを作り、運営し、その社会をさらにいいものに変えていく力

その下地として「十全な他者認識や他者への共感能力」(門脇 前掲著)がある。

社会認識・・・社会についての知、社会についての知識とそれをつかむ過程。(ある辞書から)

以上から、次ような相互関連を考えた。

社会性=社会認識→社会力=社会認識

(注) 社会へのスタンス(社会性・社会力)には、それぞれに見合った社会認識がある。

ここで、「見合った」というのは、社会認識の量だけでなく、量とともに質が関係しているという把握がある。

また、社会性は不要ではなく、社会力へ突き抜ける必要がある ととらえる。

(06824補正)

3、市民として、地域に生きるには

25条 生存権・・・健康で文化的に生きるの主体として、地域に生きる

自治の主体として、主権者として生きる

ガラスの破片への想像は、長田新編『原爆の子—広島の子—のうったえ』(岩波文庫)の中の、小学校5年生(当時満5歳)の若狭育子さんが書いた以下の部分が手になりになる。

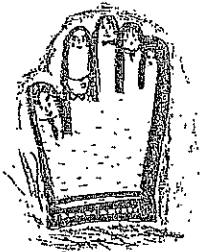
「…お母さんを見ると、こしから下が血だらけです。北側の窓からとんできたガラスのため、お母さんのせ中には、大きなガラスがつきささったままです。そのきざろは、大きくふくれて、…長さ15センチメートル、深さ5センチメートルくらいで、血がどんどん出ています。お父さんはきゅあきゅあいわれるお母さんのせ中のガラスをぬきとり、ヨードチンキをビンごとぶっかけて、しょうどくされました。…」

そして、朗読劇から芝居へと橋を渡った際には、「核兵器の威力を認め、核の所有を前提にした」日本政府の「核の傘」論が、「あよなむごい別れ」(竹造)をうみだす核兵器の残虐さを二度と引き起こさない道とは程遠い」として、原発再稼働や北朝鮮の核・ミサイル問題も含めた国内外の動向の判断基準は、「広島・長崎の被曝に関わる一連の事実・史実」だと書いている。被爆者の「[手記]を「聖書」のように読み続けてきた」(「核兵器廃絶シンポジウム 核完全廃棄21世紀こそ」『朝日新聞』2000.8.6.)井上ひさしを「想起して」芝居に臨んだというのだ(『劇団キンダースペース トライアルシアターVol.3』)。

小林の『父と暮せば』公演への想いは、1994年9月のこまつ座の初演以来24年、四半世紀に及ぼうとしている。日頃柔和な小林が役者として眼光鋭く「…やい、鬼」と叫ぶ場面は、かたずをのんで見つめる観客の前に、全存在をかけて事実・史実を伝えようとしている社会科教員の矜持が重なる。

かつて、1956年に被爆者が初めて登場したドキュメント映画『生きていてよかった』三部作(「死ぬことは苦しい」・「生きることも苦しい」・「でも生きていてよかった」)を製作した亀井文夫は、「ぼくが広島、長崎を見て考えたことは、原爆や水爆を使ってまで守らなければならないようなものが、いったいこの世にあるのだろうかということだった」述べてといる(亀井文夫『戦う映画—ドキュメンタリストの昭和史—』岩波新書、1989.)。

この映画は英語版と日本語版を作ったが、配給元が付かずお蔵入りとなった。翌1957年に亀井は、長編ドキュメント映画『世界は恐怖する』で“死の灰”の実態にメスを入れようとした。その後、亀井の想いは井上ひさし、黒木和雄、山田洋次らにより脈々と受け継がれ、舞台劇、映像として継承されてきた。



鳩ヶ谷中学校模式学級同窓会のお

今年も やるよ

カレーを作って

お話とゲ-

楽しみ



6月 20日

10時から午後1時

鳩ヶ谷中学

300円

歴史教育者協議会 福岡大会 第21分科会 障がい児教育 レポート

市民性と障がい児教育……社会認識の教育への接近

はじめに

わたしはだれ 市民性=シチズンシップ

1、学校から離れて、市民として学校へ

2009年3月で再任用1年も終了した

しかし、付き合いは続く。同窓会を1年に1回開く。

毎週1時間の授業=太鼓をはじめて3年目。

月1回のスポーツ活動 卓球

小学校の体育館を使い、卓球台をその小学校から借り、ラケットは

中学から借り(毎回中学から)、ネットと支柱は鳩ヶ谷市(教育委員会社

会教育課)から借り(貸与=管理は私)

……教員と卒業生の市民性を問うことになった。

市民同士のつながりの質と、社会認識の裏打ちをもった市民性=社会力

の形成を課題とする

『父と暮せば』公演 朗読劇から芝居へ (1)

滝澤 民夫

小林幸雄の授業実践

50歳代半ばに小林幸雄は障がい児学級での社会科教育実践に取り組んでいる(「障がい児学級で社会科を一当たり前の教育 中学校での三年間」『歴史地理教育』683号、2005.4.)。そこでは、「さまざまな(知的、情緒)障害を抱えた生徒」に「何を、どう教えるのかが問われた」という。3名の教員で8名の生徒を1週28時間のカリキュラムで担当して、小林は、国語・数学5、体育3、社会4、生活5、生活単元2、総合1、道徳2、計22時間を受け持った。小学校同様の多科目担当で、文字通り生徒と密着した3年間の学級生活であった。

そこでの(社会科)教育上の困難は、「言葉の獲得」・「関連の思考」・「因果の把握」・「話し合い」であり、「どのような言葉をどのような方法で獲得するか」・「関連をとらえる練習」・「原因と結果で考える練習」・「他人の言葉を聴き、対話をするための繰り返し」が社会科教育の課題になったという。しかも、中学校社会科としての[地理・歴史・公民]の枠組みを前提にした授業である。絵画資料、絵本、地図、用語カードなどの利用など、さまざまな工夫と協議が繰り返されたはずである。時事問題や戦争と平和学習も取り組まれたが、学級行事から学習課題をみつける取り組みである「クラス合宿」を小林は紹介している。

それによれば、埼玉を起点に関東への視野を広げながら、自然の多様性・歴史・さまざまな産業・人びととの出会いの視点から、山梨～静岡、埼玉の秩父、千葉へと足を延ばした。子どもたちは1年で富士山、河口湖、甲府盆地のブドウづくり、箱根の関所、小田原(城)を、2年で埼玉古墳、秩父吉田町と秩父事件の史跡、長瀨、荒川、そばづくりを、3年で大吠崎、銚子漁港・魚市場での調理実習、九十九浜、船橋三番瀬、千葉港、冷凍倉庫をまわり、千葉の海のテーマでは、事前の調べ学習、事後の作文、社会科の漁業学習、掲示物作り、発表練習と発表会に取り組んだ。

生徒総会への参加も含めた3年間の取り組みをまとめて小林は、子どもが獲得する社会認識の基礎として、①人びとへの関心、②自分と他人とのつながりと違い、③つながりのさまざまな在り方、④つながりの総体としての社会、⑤社会にはいろいろな事件がある、⑥事件には起きる「わけ」がある、⑦事実にもとづいた社会への価値判断(正・不正、良・悪、益・害、好・悪[嫌]など)をする、⑧社会には「うそ」がある、⑨社会には歴史があり、社会生活の空間がある、という9つのイメージを挙げている。

さまざまな障がいを持つ生きた人間と関わる大変さを思うと、報告に目を通すだけでも、感動的な教育実践である。そして小林は、中学社会科教員退職後、この人と人とのつながりを通して社会や歴史を認識する手立てとして、演劇活動を選択した。それゆえに、人の生と死をめぐる言葉のやり取りによる自己表現の方法として、井上ひさしの『父と暮せば』に行き着いたのではないだろうか。

小林幸雄と『父と暮せば』

西川口に小劇場を持つ劇団キンダースペースのシニア・ワークショップの一員(練習生)となって

半年後、劇団主宰者原田樹一から示された幾本かの台本から、小林が選んだ作品が『父と暮せば』の第一場であり、その時の指導者が女優深町麻子だった。出会いは偶然だが付き合いは必然で、小林が教員生活の後半に主体的に関わった「社会認識を正しく教えるステップを組み立てる役割」(高橋誠「障がい児教育と社会科」『歴史教育・社会科教育年報 2004年版』2005.1.)を担う障がい児教育の延長線上に、「竹造と美津江」父娘の語らいが誕生したのである。小林の『父と暮せば』公演の足跡は次のとおりである。

- 2009年12月 劇団キンダースペースシニアワークショップ中間発表会(朗読劇)[深町麻子・小林幸雄]
- 2013年4月 劇団キンダースペース公演(ワークユニット、朗読劇)[木戸由香里・小林幸雄]
- 2013年7月 駿河台大(朗読劇)[木戸由香里・小林幸雄]
- 2014年6月 大東文化大(同)[木戸由香里・小林幸雄]
- 7月 駿河台大(同)2回[木戸由香里・中川智美・小林幸雄]
- 2015年6月 早稲田大(同)[中川智美・小林幸雄]
- 駿河台大(同)2回[中川智美・小林幸雄]
- 7月 大東文化大(同)[同]
- 2016年5月 早稲田大(同)[同]、大東文化大(同)[西田百香里・小林幸雄]
- 駿河台大(同)2回[中川智美・小林幸雄]
- 2017年6月 大東文化大(同)[同]、早稲田大(同)[同]
- 2017年12月 劇団キンダースペース公演(芝居)[深町麻子・小林幸雄]
- 2018年6月 大東文化大(朗読劇)[中川智美・小林幸雄] (予定)

大学での最初の朗読劇の教室公演に際して小林は、「井上ひさしの作品『父と暮せば』に対する時、私の思いは、被爆した戦争末の広島と、戦争直後の広島の現実(1948年は私の生年です)に向かうのですが、同時に日本文学のひとつの伝統と対面しているようです。先年亡くなった丸谷才一さん(最近、集英社新書『書物の達人 丸谷才一』が発刊)が指摘したことですが、この作品は『太平記』までの伝統の復活にあたるそうです。伝統とは死者たちの亡霊の活躍です」と呼びかけている。

丸谷才一は『父と暮せば』を「爆笑と哄笑と微笑の喜劇である」と紹介して、「死者が生者に語りかけ生者が死者に応えるという対話」こそがこの作品の真骨頂だと評した(「今週の本棚」『毎日新聞』2014.8.17.)のだが、これを受け止めた小林には、その「対話」の在り方と、「被爆の内実」をどのように現在～未来に語り伝えるかという使命感がある。在職中の「どのような言葉をどのような方法で獲得するか」との問題意識と、「他人の言葉を聴き、対話をするための繰り返し」という方法論により、小林の目的は社会科教育から「対話」による被爆体験の伝承へと展開したと言えよう。

3度目の公演に際して小林は、不条理を不条理としてリアルに再現することが「俳優の仕事の一端」だとして、次の台詞のやり取りを「上演者の思い」として紹介している。

戯曲の中で、竹造は言う。「…やい、鬼。これは人間の身体に突き刺さったガラスの破片ぞ。あの爆風がヒロシマ中のありとあらゆる窓ガラスを木っ端微塵に吹っ飛ばし、人間の身体を、(涙声になっている)針ネズミのようによくさったんじゃ…」
それに対し、美津江(いつの間にか左の二の腕を押さえている)「やめて！」。